



HIROSAKI
UNIVERSITY

学園だより

2025 春
弘前大学
Vol.212

特集

卒業・修了・退職にあたって



作品名：楽園（5画面1組のうち1つ）油彩画 サイズ 145x1120mm 制作：教育学部教員養成課程 美術専修4年 引数林さやか

巻頭言	
弘前大学学長 福田 眞作	2
特集／卒業・修了・退職にあたって	
卒業生・修了生	4
教職員	10
研究室紹介	18
TOPICS	20
新任教員紹介	22
編集後記	22

ともに思い描く 未来に向かって

弘前大学長 福田眞作



記録的な豪雪に見舞われた冬が終わり、ここ津軽にも春が訪れました。春は新たな一步を踏み出す旅立ちの季節であり、別れの季節でもあります。弘前大学を卒業される学生の皆さん、そして今年度で退職される教職員の皆さんへ、心からの祝福と感謝を込めて、送別の言葉をお贈りいたします。

卒業生の皆さん、このたびはご卒業、誠におめでとうございます。令和2年1月に国内で初めて新型コロナウイルスの感染者が確認されて以来、皆さんの高校生活の終盤や大学生活の初めの2年間は、予想もしなかった困難に直面しました。コロナ禍の中での大学受験やオンライン授業といった新しい環境に戸惑いながらも、仲間と支え合い、前向きに歩む姿に、私たちは深い感銘を受けました。この数年間を懸命に乗り越え、晴れて今日の日を迎えられた皆さんを、心から誇りに思います。本当にお疲れさまでした。

コロナ禍の中で、私たちは多くの困難に直面しましたが、それと同時に、数多くの大切なことを学ぶ機会を得ました。たとえば、全国のOB・OG、本学の教職員、そして全国の団体や個人の方々からのご寄附や食料の提供です。皆さんの空腹を満たすだけでなく、何よりも疲れた心に優しい癒しと励ましとなりました。その善意の一つひとつが皆さんを支え、この困難を共に乗り越える力になったのではないのでしょうか。この日々を通して学んだ、他者への感謝や理解、困難なときに協力し合うことの尊さは、きっと皆さんの心の

中でかけがえのない宝物となったに違いありません。いよいよ皆さんは、新たな世界へと旅立っていきます。皆さんのこれからの人生は未知の挑戦に満ちていますが、それと同時に無限の可能性が広がっています。弘前大学での学びを通じて得た知識、経験、そして確かな自信を糧に、胸に抱いた夢に向かって力強く歩みを進めてください。その歩みの先に、皆さんが描く理想の未来が待っていることを、心から願っています。

卒業生の皆さんの多くは、弘前市での暮らしからも卒業となります。皆さんが学びの場とした弘前市は、豊かな歴史と伝統に彩られ、高い文化の薫りが漂う街でありながら、物価や家賃が手頃で、治安の良い安心して暮らせる学園都市だったのではないかと思います。コロナ禍によるさまざまな制限がある中でも、地域の課題に主体的に取り組んだ経験、大学で出会った友人・先輩・後輩、そして日々皆さんを支えてくれた教職員との交流、さらには課外活動、オンライン形式を含む海外留学、アルバイトやボランティア活動を通じて地域の方々とのふれあいなど、弘前大学ならではの多彩な学びと暮らしが、皆さん一人ひとりの成長につながっていたならば、これ以上に嬉しいことはありません。街ごとキャンパスとも言える弘前市で過ごした青春の日々を忘れずに、いつまでも大切な思い出にしてください。今後は、弘前大学のOB・OGとして、学びの故郷である母校を温かく見守り、力強く応援して下さるようお願いいたします。何より、皆さんが地域で、全国

で、そして世界で元気で活躍してくだることが弘前大学への最大の応援になります。そして、弘前大学もまた、より一層の発展を遂げていくことが皆さんのこれまでの努力に報いることであると信じ、活発な教育研究活動を展開して行きたいと思えます。

退職される教員の皆さん、長年にわたり、弘前大学の教育および研究の向上に多大なるご尽力を賜り、心より感謝申し上げます。先生方の豊かな経験と卓越した知識によって、本学の教育・研究環境は一層充実したものとなりました。その功績は本学にとってかけがえのない財産であり、今後とも本学の歴史の中で受け継がれていくことと思えます。そして、先生方が学びの場で育まれた学生や若手研究者にとっては、恩師としてそのお名前が刻まれていくことでしょう。今後のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

本学を離れる事務職員の皆さん、多岐にわたる業務に尽力され、弘前大学の発展に大きく貢献していただいたことに心より感謝申し上げます。とりわけ、国立大学法人化後の約20年間、本学の目まぐるしい改革に携わっていただいた皆さんの努力と実績があったからこそ、発展を遂げ、現在の弘前大学があります。私個人の話になりますが、本学を卒業後は医師として主に診療に従事してまいりました。昨今の医療は、高度化・複雑化し、良し悪しは別として細分化が顕著です。そのため、医師だけでは安全・安心な医療を患者さんに提供することは難しく、チーム医療の重要性が増しています。医療職の皆さんが中心的な役割を担い、それを支える事務職員の皆さんの“プロの仕事”があったからこそ、私は大過なく医師としての役割を果たすことができました。その後は病院長として、今は学長として、病院や大学の管理運営に当たってきましたが、事務職員の皆さんの働きがなければ、この大きな組織を牽引することは不可能であると実感しています。歴代の院長や学長に仕えたすべての皆さんに対して、代表して感謝を申し上げます。ありがとうございました。定年退職される皆さんの中には、本学が唯一の職場であった方もおられます。数多くの出来事や思い出の一つ一つが、皆さんの胸に深く残り、達成感や充実感を胸に、本学職員としてのキャリアを締めくくられたのであれば、これほど喜ばしいことはありません。いわゆる人生100年時代を迎え

た今、定年退職は新たなスタート地点でもありません。これからは長年培われた経験を活かしながら、趣味や旅行、家族との時間など、新たな楽しみや挑戦を見つけていただければ幸いです。これまでのご縁に感謝するとともに、またお会いできる日を楽しみにしております。本当にお疲れさまでした。

戦後80年を迎えた日本は、急速に進む人口減少と高齢化により社会構造に大きな転換期を迎え、高等教育機関を取り巻く環境も大きく変化しています。法人化後20年間にわたる国からの財政支援の縮小に加え、昨今の急激な物価上昇や人件費の高騰が重なり、国立大学法人はこれまでで最も厳しい経済状況に直面しています。さらに、18歳人口の減少が顕著な地方では、将来的に大学志願者の確保が困難になると予測されており、地方大学が持続的な発展を描くことはますます難しくなっています。しかし、このような厳しい状況が続く中、いま弘前大学には大きな希望の光が差し込んでいます。それは、弘前大学が「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（Program for Forming Japan's Peak Research Universities = J-PEAKS）」に採択されたことです。日本には国立大学法人86大学を含む813の大学（令和6年時点）が存在しますが、その中で、国際卓越大学に次ぐ25研究大学の1校に本学が指定されました。我が国全体の研究力を牽引する研究大学群の一員として、社会変革を担うことになります。本学を卒業される学生・教職員の皆さんには、研究大学としてさらなる飛躍を遂げる弘前大学に引き続きご注目いただき、温かいご支援と激励を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。私たちは、同窓生の皆さんが「弘前大学出身であること」に誇りを持って語ることができるよう、教育研究のさらなる充実と地域社会への貢献を一層深めてまいります。

最後に、今一度、令和6年度をもって卒業される学生の皆さんと退職される教職員の皆さんのご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げ、お別れの言葉といたします。



河瀬 綾乃

人文社会科学部文化創生課程



内沢 杏那

人文社会科学部社会経営課程



算用子 眞充

人文社会科学研究所
人文社会科学専攻

2020年の私へ

コロナ禍の2020年に入学式もないまま、ぬるっと弘前大学に入学しました。思い描いていた華やかな大学生活とはあまりにかけ離れていて、あまりにゆっくり流れる無色の日常に、漠然とした不安を感じていたことを覚えています。この先もコロナに抑圧され、友だちのいないまま、留学もできないまま、マスクで人の笑顔の見えないまま、1人でパソコンに向かうだけで大学生活を終えてしまうのか…と諦めていました。

ねえ、聞いてよ！2020年の私！2025年の私は弘前でとっても幸せに大学生生活を謳歌しているよ！新たな世界を見せてくれた先生方、溢れる笑顔とともにかけがえのない日常を一緒におくってくれる友だち…そのような大切な方々と紡ぎ出す時間は、言葉にできないほどに貴重で大切な思い出となっています。帰り道に雪合戦したり、鍵盤ハーモニカや歌・ダンスやピアノといったパフォーマンスの練習をしたり、教職課程を闘いぬいたり、「卒論の森」と題して仲間たちと図書館にこもったり…。そして、たくさんの方々のサポートのおかげで念願かない、ハワイへ1年間の長期留学に行くこともできました。けたたましく色鮮やかな毎日が、その月日の流れを止めたいほどに愛おしくて愛おしくて。2020年の私へ、弘前大学に決めた私の選択は、最善のものになっているよ！弘前大学5年生の私はとってもとっても幸せだよ！

可能性は無限大

大学生活は、自分の興味関心があることに熱中できた日々だった。特に、海外に旅行したことが最も印象深い思い出である。旅行先は台湾で、2泊3日滞在した。日本とは、文化や言語が異っているため、初めて見る景色や食、生活行動など新しい発見や出会いがあり刺激的であった。

海外に行くにあたり、現地の言葉で会話をする夢を持っている。そこで、中国語を3カ月学び、簡単な会話レベルを習得した。現地で言葉が通じたときは、嬉しさが抑えきれなかった。言葉が通じなくても、景色や食などを楽しめると思う。しかし、言葉が通じ合えることで世界を超えた交流ができ、言語だけではなく文化も堪能することができた。

新しいことに取り組むと、自分の視野はまだ狭いと実感する。だからこそ、見たことない、経験したことないことに挑戦することは、学びや発見が多くて楽しい。海外旅行以外にも、自分の行きたい地域に行くことややってみたいことは、可能な限り実行してきた。大学講義でも、感性や考えが異なる人と関わると、その視点があったか！と自分では想像つかない視点に毎回驚かされていた。そこから、再び考えを深めて別の発見を得られるのもまた面白さがあった。

4年間を通して、多くの学びと経験を得られた。この挑戦を今後も継続し、自分の可能性と視野を広げていきたい。

コロナと考古学と大学

弘前大学に入学してから6年間で過ごしたことになります。中高6年間で片田舎の男子校で過ごした私にとって、大学は新鮮なことばかりでした。なんとなく1年間で過ごし、友達ができ最も楽しい時期をコロナに奪われ、成人式もなくなりました。

そんな中で考古学と出会いました。長期休みに行った一ヶ月ほどの発掘調査も今では良い思い出です。学問の世界では、研究すればするほど自分が何も知らないということを思い知らされました。卒業研究だけじゃ飽き足らず、修士課程まで研究を続けました。大学院ではレベルの高い人に囲まれ日々の授業をこなす中で修士論文を執筆し、何度か折れそうにもなりました。なんとか修士論文を提出できましたが、研究については達成感と共に反省ばかりです。もっと勉強すれば、もっと別の考え方があっていいのではないか、と自問自答した日々で、正解を出せたとは思っていません。ですが決して後悔はしていません。来年からは幸運にも考古学を仕事にできました。今後でもできる限り、研究を続けていこうと思います。

6年間、未熟な自分を指導していただいた指導教員をはじめとして大学出会った全ての方々に感謝しています。ありがとうございました。



大川 菜々子

教育学部
学校教育教員養成課程

4年間を振り返って

大学に入学し、新しい生活に胸を躍らせていた気持ちは、今でも鮮明に覚えています。4年間という時間は、小学6年生が高校1年生になるほどの長さですが、大学生活は本当にあっという間でした。この4年間でどれほど人として、大人として成長できたのか、自信はありません。しかし、振り返ると、多くの経験をし、たくさんの人に出会い、非常に充実した日々だったと感じています。

大学は自由です。学びたいこと、やりたいこと、遊びたいことに時間を使えます。そこで学んだのは、「人はそれぞれの歩幅で進んでいる」ということです。目標に向かって走るのも、立ち止まって休むのも、自分のペースでいい。人と比べるのではなく、自分が確実に前へ進んでいれば、それだけで十分価値があるのだと思います。

「青春を謳歌せよ」——高校の校長先生がおっしゃっていた言葉です。まさにその通り。4月からの新しい生活に不安はありますが、限られた時間を大切に、人生をより豊かに彩っていききたいと思います。

最後に、これまで支えてくれた家族、先生方、友人をはじめ、関わってくださったすべての方々に、心から感謝申し上げます。大学で得た学びを忘れず、それを次世代に還元できるよう、これからも邁進していきます。



田部 陸空

教育学部
学校教育教員養成課程

「中途半端」でもいい

私自身、この大学生活、何か大きなことを成し遂げたわけでもなく、特別なものを身に付けたわけでもありません。ただ、私は、毎日を「生きて」きました。朝起きて顔を洗い、洗濯をし、バイトに行き、講義を受け、スーパーで買い物をし、部屋を掃除し、ご飯を作り、眠りました。「生きる」ことで、私は毎日、色を重ねていきました。色を重ねると黒になります。人は黒に染まって、何も見えなくなったとき、「ああ、退屈だ」と感じるのだと思います。でも私は今、真っ白です。なぜなら私は、白色を重ねていたからです。新鮮で鮮やかな白色を、重ねてきたからです。

後輩の皆さんに言葉を送るなら、私は日々、いつもと少し違った何かを、経験するようにしました。そして、その経験をするには、自ら手を伸ばさないといけない、湧いてくるものではないのだと、この4年間で実感しました。教員になっても、子どもたちに愛情を持って自ら接していくことで、共に経験し、成長していききたいです。

最後に、私が未来に向かって今を生きているのは、支えてくれた家族や先生、側に居てくれる大切な誰かの存在があるからです。感謝をし、胸を張って進みます。



葛西 良城

教育学研究科
教職実践専攻

教職大学院での学びを終えて

教員を二十五年続けてきて、教職大学院で再び学び直す機会をいただきました。とりあえず授業っぽい物を作るのに必死だった学部新卒の頃から、大量の情報をたたき込むことに必死だった時代を経て、それなりに形になってきたと感じ始めた中でも、ずっと自分の中に疑問であり続けたことがありました。たとえば目の前の生徒が「うんうん」と頷いてくれ、周囲が「それで良い。」といってくれても、ずっと「こんなことしている生徒達の力を伸ばすことになるのか?」という疑問です。日々の仕事に流される中では向き合うことは出来ない疑問でした。この二年間、それまで自分がプレーヤーである視点からしか考えたことがなかったものを、俯瞰した視点から眺め、実務から切り離されたところから考え直すことが出来ました。ひたすら自分の中の「問い」を自分のために調べ、考える時間を持つことが出来たことは、非常に幸福だったと思います。今年は、職場に復帰して実務を行いながら研究の日々を送っていますが、根本的なものを問い直した上での学校は、それまでの物とは全く別なものに見え始めています。今後はここで得た学びを基にして、より有意義な教育活動を行っていきたいと考えています。二年間ありがとうございました。



白井 宏樹

医学部医学科



W・M

医学部医学科



中田 英莉加

医学部医学科

青森県の魅力はいかに!?

一本文章に関連する利益相反(COI)は一切存在しません。一

弘前大学医学科の卒業生は青森県定着率などを除けばそのほとんどが県外に行ってしまう、という悲しい実情があります。私は青森県の魅力に憑かれ、一般枠で入学しましたが青森県内に残ることを決めました。500文字程度の文章、という制限がありますので長々とは書けませんが青森県の魅力を発信する「卒業にあたって」にしようと思います。

青森県は雄大な自然と歴史が融合する魅力的な土地です。恐山や津軽海峡といった絶景スポットがあり、白神山や奥入瀬渓流、岩木山や八甲田山では四季折々のアウトドアアクティビティを楽しむことが出来ます。また、私が最も驚いたことの一つでもある弘前城の堀の水の仕組みに代表される歴史的工夫やねぶたなどの地域特有の文化も感動的です。私はこの先も青森県在住ですので、この魅力をまだまだ堪能しようと思います。

最後になりますが、私の学生生活6年間を支えていただきましたすべての方々に、心より感謝を申し上げます。この場を借りて、皆様のお力添えに深く御礼申し上げます。

感謝

6年前、大学生活への期待と少しの不安を抱えて、弘前大学に入学しました。入学式で見た部活勧誘のチラシの量の多さに圧倒され、どんな素敵な日々が待っているのだろうと胸が高鳴りました。あの時から6年も経ったことが信じられません。振り返ると沢山の出来事がありました。雪道で車がスタックし友達と車を押したことは、地元の関西では経験できない、とても良い思い出です。部活では、優しく頼りがいのある先輩方に支えられ、本音で語り合える同期と共に多くの時間を過ごし、元気いっぱいの後輩たちと笑い合った日々が何よりの宝物です。どんなに辛い時でも、必ず笑顔にさせてくれました。

学業面では何度も挫けそうになりましたが、周りの人たちに支えられ、励まされながらなんとか卒業までたどり着くことができました。病院実習では、医学的な知識だけでなく、実際に医療者として患者さんと接する中で、医師としての在り方を少しずつ学びました。

最後にはなりましたが、お世話になった先生方、友人、そして今まで温かく見守り続けてくれた家族に感謝申し上げます。大学生活で学んだことを活かし、これからも成長し続けたいです。

卒業によせて

私は大学受験で弘前を訪れるまで、東北どころか、埼玉県より北を訪れたことがありませんでした。実家のある石川県から一人で弘前に向かったあの日、降りしきる雪の中を走る奥羽本線からの車窓を今でも昨日のこのように覚えています。

県外出身者からすると、弘前暮らしといえば雪のイメージが強い方も多いのではないのでしょうか。雪景色というのはとても不思議なもので、見る人の心持ちによって捉え方が大きく変わります。私自身、試験ラッシュの最中に眺める雪景色はどこか憂鬱なものでしたが、進級判定の後ではどんな大雪を前にしても晴れ晴れとした気持ちでした。

振り返ってみると、私の6年間の大学生活は決して順調なものではありませんでした。たくさんの方々に支えていただきながら細い糸をたぐりよせるようにしてなんとか進級を重ねてきました。間違いなく私一人の力では医師を目指し続けることができなかったと思います。それでも、良かったことも耐え難いほど辛かったこともすべてが今日の私をつくってくれているのだと思うことができるようになったのは、この6年間私が人に恵まれていたからです。

これからも温かい気持ちで雪景色を見つめていられるように励んでいきます。



目時 紀菜

医学部保健学科
放射線技術科学専攻



近江 穂香

医学部保健学科
検査技術科学専攻



船澤 朱里

保健学研究科
保健学専攻

大学生活を振り返って

4年前の春、合格発表の後にばたばたと引っ越しをし、一人暮らしや新しい出会いへの大きな不安と少しの期待の中で新生活が始まったことを今でもまだ鮮明に覚えています。想像していた大学生活よりもハードでしたが、レポートや課題に追われる中で専攻の仲間たちと徐々に打ち解け、助け合えたことがとても大きな力となりました。専門的な知識を学ぶ中で、病院実習や学会発表に臨めたことは今後の自分の糧となる貴重な経験だったと思います。

改めて大学生活を振り返ってみると、賑やかな専攻の仲間たち、親身になって相談に乗ってくださる先生方、アルバイト先の皆さんなど、とにかく周りの人に恵まれていたように感じます。たくさんの方の力を借りながら、一人の人間として少しは成長できた大学生活だったのではないかと思います。これまでお世話になった全ての方々に感謝申し上げます。

四年間過ごす中で、四季折々、様々な景色をみせてくれる弘前が好きになりました。4月からは新天地での生活となりますが、時々弘前に遊びに来たいと思っています。これまで学んだ全てのことを生かして、放射線技師として精進していきます。四年間ありがとうございました。

大学生活を振り返って

大学生活4年間を振り返ると、あっという間に過ぎたなという印象です。入学当時は地元を離れて、慣れない場所で一人暮らしをしていて寂しい気持ちもありました。地元とは違う夏の暑さ、雪の煩わしさを感じましたが慣れていくことが出来ました。

学校生活を過ごしていく日々の中で課題やレポートに追われることが多かったです。その時はつらかったのですが、今となってはいい経験したなと思っています。いろいろな県から人が集まる大学という場で、お互いの地元、方言などの話で盛り上がることもありました。こういう今まで自分が知らなかった世界や価値観を増やすことができるのも大学の醍醐味だなと思いました。

このように振り返ってみると4年間でさまざまなことを経験できました。経験したことを今後も忘れることはないと思います。これらの経験をできたのは大学に行かせてくれた両親、指導して下さった先生方、友人達のおかげです。多くの方に支えられて4年間充実した生活を送ることができて本当に良かったですし、悔いはないです。弘前を離れることになりましたが、また綺麗な桜を見に訪れたいと思います。

修了にあたって

中学生で目指した理学療法士になるために弘前大学へ入学して4年、ぼんやりと大学院に進むかもしれないと思い、卒業研究で面白さに気づき、大学院へ進学した2年間は特に濃く、あっという間の6年間でした。

大学を卒業し、非常勤勤務で働きはじめ、他の大学院生よりは時間的余裕があるはずなのに授業と臨床についての勉強を両立することは、身体的にも精神的にも大変で、早く終わりたいと何度も思いました。そのような状態で、この2年間はたくさんの人に支えられて何とか乗り越えることができました。初めての学会発表は右も左もわからない中、指導教員の先生方や研究室の先輩方にご助言いただいたことで終了することができ、飲み会や観光も楽しむことができました。また、学部の同期は度々連絡をいただき、実際に会った際は「研究がんばれ!」と励ましてくれました。

この6年間は、理学療法士としての勉強や研究だけでなく、見聞を広げ、多くの方と出会い、大きく成長することができたと感じています。この6年間で学んだことを生かして、社会へ貢献していきたいと思っています。また、弘前大学には幼稚園から18年間お世話になりました。お世話になりましたすべての皆様に深く感謝申し上げます。



中嶋 脩汰

理工学部
物質創成化学科

櫻井 琢

理工学研究科
理工学専攻

大倉 寛澄

理工学研究科
理工学専攻

大学生生活4年間を終えて

4年間を振り返ると、周りの人からの助けがあったおかげで、私はとても充実した大学生活を送ることができました。寮生活から始まり、大学での講義、アルバイト・サークル活動など、何を始めるにも周りの人が私より上手くできるため、それについていくので精一杯でした。迷惑をかけることもありましたが、周りの人たちを手本にすることで、少しずつ成長できたと思います。

夢や目標が定まらないまま大学生活を送っていた私ですが、研究室配属だけは「こしかなない！」と決めて入ったのが印象に残っています。自分の研究テーマに対して苦戦することもあります。誰かに興味をもってもらえる瞬間は他では得られない嬉しさがあります。研究室でも手本となる先輩や同期がいたおかげで、成果をあげることができました。今年で大学を卒業しますが、4月からは大学院生として研究をもっと面白いものにしていきたいと思っています。

最後になりますが大学生活を送るにあたって支えていただいた方々、そして何より4年間心配をかけながらも応援してくれた母へ深く感謝をしたいと思います。ありがとう！

人生の転機

弘前に来てから早いもので4年が経ちました。この4年は学部卒業までの時間ではありません。私は高専を卒業後、3年次編入という形で弘前大学に進学しました。そして学部を卒業後、博士前期課程へと進学しました。

この4年間は新しい出会いと多くの仲間にも恵まれ、その人たちのおかげで本当にさまざまなことを学ぶことができました。振り返れば、その経験を通して少しは成長できたのではないかと感じています。その中でも、現在の研究室に配属されたことが私にとって「人生の転機」だったと強く思います。研究を通じて新しい知識や視点を得られただけでなく、挑戦する意義や楽しさを実感できるようになりました。

そして、もっと挑戦したいと思うようになり博士後期課程へ進学します。4年前の私には、博士後期課程への進学は全く想像していませんでした。しかし、これまでの経験と人との出会いが、少しずつ私をこの道へと導いてくれたのだと思います。それが偶然なのか必然なのかは分かりませんが、出会いの一つひとつが自分の成長に大きな影響を与えていると実感しています。

これからも挑戦することと出会いを大切にしながら、研究に邁進していきます。これからもお世話になります。

学生生活を終えて

私は弘前大学理工学研究科自然エネルギー学専攻修士課程に所属しています。進学しようと思ったきっかけは、小学生の頃に東日本大震災を被災した経験からです。エネルギーインフラの重要性を身をもって体験したことから、自分自身も再生可能エネルギーについて学びたいと思うようになりました。大学院ではバイオマスエネルギーについての研究を行っていますが、研究室配属当時は私は日本人1人であり、留学生の大学院生と必死にコミュニケーションをとりながら研究に励んでいました。言語の壁もさることながら、文化圏の違いもあり苦労しましたが、たくさんの学びを得られました。最も得られた学びは物怖じせず挑戦するという思考です。自分以外が留学生の環境でも萎縮せずにコミュニケーションを積極的に取ることで、自身の価値観や世界観を広げることができたと感じています。

今年度で6年間の大学生活を終えて、社会人生活が始まります。激動する社会情勢の中で社会人として物怖じしない精神で自身の価値観を広げるだけでなく、主体的に考え多角的に物事を見る目を養っていきたいと考えます。



高橋 砂羽子

農学生命科学部
食料資源学科食料

若原 祥太郎

農学生命科学部
生物学科

入山 就

農学生命科学研究科
農学生命科学専攻

小さな幸せ

弘前での一人暮らしは、あっという間に4年が過ぎました。思い返してみると、私の新天地での暮らしは毎日がとても刺激的なもの…というわけでもなく、むしろ淡々としていたと思います。でも、その生活が楽しくないというわけではなく、友人とくだらないことで笑い合える毎日が好きでした。

そんな大学生活での楽しみの1つは、友人と一緒に大学生協が開催するイベントに参加することです。スタンプラリーを集めるために教育学部棟に初めて訪れたり、クイズに答えるために弘前大学の歴史を調べたり、イベントに参加しないと知らなかったような新たな発見がありました。このイベントは、授業や実験の合間にリフレッシュする良い機会であり、友人との会話のきっかけでもありました。遠出したり、お金をたくさん使ったりなくても、思い出を作ることができることも学びました。

最後になりますが、私がこの4年間をととても楽しく過ごせたのは、周りの方々に支えられていたからだと思います。両親、先生、友人、全ての方に感謝いたします。ありがとうございました。

大学4年間を振り返って

私が弘前大学に入学するきっかけを作ってくれたのは母親の存在でした。母親の実家が弘前市の隣の藤崎町にあるということで私が幼少のころから弘前市には何度も遊びに来ていたので街並みなどはよく知っていました。その影響が大きくあり私の地元の北海道で大学に進学するのではなく弘前大学に進学しようと考えました。

私の大学4年間を振り返ると1年生、2年生の頃の思い出ももちろんありますがそれよりも3年生からの研究室に配属されてからの2年間の方がいい思い出や辛かった実験の思い出などたくさんありました。研究室での活動で一番忙しくそしてつらかったのは3年生の夏休みの時期でした。この時期から私の研究がスタートしたのでこの頃は覚えることがたくさんあり、朝早くから研究室に来て夜遅くに家に帰るというのを結構していたのでこの時期は私の中ではかなりつらかったです。一方で研究室ではかけがえのない同級の友人や先輩に出会えて非常に感謝しています。

最後に、大学4年間を通してお世話になった先生方、研究室の皆様、そして当たり前ですが大学に4年間通わせていただいた両親に心から感謝致します。

6年間の大学生活での出会い

大学は“出会い”の場とよく聞きますが、多くの場合、“出会い”という言葉で想像するのは恋愛的な出会いだと思います。しかし大学での出会いは恋愛に限った話ではありません。講義や部活動、バイトなどいろいろな場所で多くの人と出会う機会があるでしょう。私にとって出会いは、出会った方々と共にした学びや多くの経験を通じて成長を促すものでした。

私が大学生活の中で特に大きな刺激を受けたのは、研究室での出会いです。3年生後期から所属した研究室での3年半は、これまでの人生で最も忙しい期間でした。心が折れそうになることも何度もありました。そんな日々の中で、同期や先輩・後輩との何気ない会話や温かい言葉に助けられ、先生方の指導やアドバイスによって成長することができました。

皆さんも学びを進める中で、新たな出会いが待っていると思います。この出会いは大学生活をさらに豊かで素晴らしいものにしてくれるものです。私も来年から社会人になりますが、大学で出会った人と過ごした日々、共に学んだことを心にとめ、充実した日々を過ごせるようにいっそう精進していきたいと思います。

最後になりますが、大学で出会い、お世話になった皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。



教授 宮坂 朋

人文社会科学部
文化財論講座

退職にあたって

1994年夏中イタリアのタルクィニアでのローマ別荘発掘調査に従事し、10月1日弘前大学人文学部に着任したが、すぐ西洋文化論の学生の皆さんの計画した恐山旅行へ出かけた。恐山での卒論中間発表、温泉堪能、六ヶ所村見学と盛りだくさんだった。いきいきとした学生さんたちと抗いがたい研究対象の魅力に支えられ、あっという間に30年が過ぎ去った印象だ。

前半はイタリア、レバノン、シリア、リビア、チュニジアなどのローマ時代の考古学的調査を中心に行い、「アラブの春」からコロナ禍にかけて、ローマ時代の壁画の美術史的研究にシフトした。イタリアで掘り出したアフリカ製ランプの同范品をチュニジアの博物館で目にした時、ローマ時代の地中海交易を実感した。素晴らしい遺跡の数々を思うにつけ、平和を祈るばかりだ。

災害や戦争・疫病の30年で、世界は変わり、それにつれて考古学や美術史の研究の方法や対象が変化した。大学の組織も様変わりし、困難に立ち向かってより力強く成長していると思う。弘前大学の更なる発展をお祈りする。



教授 木村 宣美

人文社会科学部
コミュニケーション講座

英語学を弘前で学び、そして教える

1978年に弘前大学人文学部文学科に入学し1990年に弘前大学人文学部助教授として着任した。大学卒業後に英語学の研究を深めるために筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科に進学した。筑波大学大学院への進学を希望したのは恩師大石強先生の東北大学大学院での指導教員安井稔先生の指導を受けたいとの思いからであった。大学院入試の出願書類に卒業論文が含まれていた。入学者選抜のために読んだことがわかる跡を確認することができた。研究に励まなければならぬという思いを強くしたことを覚えている。

弘前大学に着任し卒論の指導に多くの時間を割くことが求められた。良い卒論を書くことをどの学生も望んでいた。英語学講読では国際的な学術雑誌に掲載された論文をよく読んだ。このことに在外研究で知り合ったMITの大学院生は大いに驚いていた。静岡での教養教育科目「英語」担当とは異なり弘前では専門教育科目「英語学」を担当することになり教育内容が大きく変わった。当時は学生と年齢が近いこともあってか、よく学び、コンパやカラオケにもよく誘われた。大学院への進学の相談もよく受けた。その後も英語に興味があり意欲のある学生とともに英語学を学ぶことができたことに感謝している。今後も弘前大学が様々な分野で発展することを願っている。



准教授 林 明

人文社会科学部
国際社会講座

自分がやるべきことだと思ったことをひたすらやってみてください。

弘前大学の学生さんたちに贈るのは、インドの「カルマ・ヨーガ」という教えです。

これは、何か行為をする場合、その結果を動機とすべきではなく、ひたすら行為そのものに専心せよという教えです。人間は往々にして、この行為をすればこういう見返り（＝結果）があるからこの行為をしようというようになりがちですが、それでは真に自分が生きた証は残せませんよということです。

私は、著名なガンディー研究者であるオーストラリアのThomas Weber先生と2012年から2015年にかけて共同で、ガンディーと日本との関係についての研究を、何の見返りも求めずただやるべき研究だと思ったから行って、“Mahatma Gandhi: The Japanese Connection” (Thomas Weber and Akira Hayashi, “Mahatma Gandhi: The Japanese Connection”, *Gandhi Marg*, Gandhi Peace Foundation, 2016, vol.37, nos.3&4, pp.407-433.)と題する英文の学術論文を書き上げました（この英文論文の日本語版論文：林明「マハートマー・ガンディーと日本との関係」『弘前大学人文社会科学部 人文社会科学論叢』第17号、pp.1-28、2024年8月）。しかし、思いもかけないことに、この英文論文は、2017年9月13日にインドのモディ首相と日本の安倍首相夫妻がインドのアーメダーバードにあるガンディー・アーシュラムを訪問した後、ガンディー・アーシュラムからの贈り物として、インド外務省を通じて安倍首相夫妻に送られることになりました。この英文論文は、インドの日本との外交上贈答品の価値がある論文であるとされ、日印関係の進展のために活用されたのです。

このように、皆さんもこれこそ自分がやるべきことだと思ったことを何の見返りも求めずやってみてください。きっと思いがけないものを世の中に残すことになりますよ。



教授 細矢 浩志

人文社会科学部
経済システム講座

少年易老学難成

弘前大学との出逢いは仙台での学生時代、当時東北を代表する著名な学生サークル「りんごっこ」の定期公演を見に訪れた47年前に遡ります。その時齢18、まさか13年後に就職先になるなんて夢にも思わず一気がつくと人生の半分以上を弘前大学で過ごしてきたことに不思議な縁を感じています。

いろんな方に支えてもらいました。ありがとうございます。なのにわたしは、大学人として真っ当な責務を果たしてきたとは思っておりません。大学の変貌ぶりがあまりに急で、沈黙思考が研究だ！と勘違いしてきた旧人類は目先の課題への対応に追われるだけだったというのが正直な感想です。「研究・教育・管理運営・社会貢献」いずれも不得手な旧世代の老人が、組織の長すら自らの手で選べなくなるほど変わった新世代の大学にできることなどタカが知れてる…と世迷い言を浮かべつつ、何も恩返しできず去る日を迎えたこと、ちょっぴり後悔しています。

学生さんには「大学生の特権は『先人の山なす思索に触れて人生を見つめる時間』を持っていること」と言い続けてきました。「タイパ、コスパ」が流行る今、この言葉が届かない現実を憂えています。「ムダなこと」「答えがすぐ出ないこと」にも果敢に挑戦する学生さんが増えることを願っています。

節目を前に思い浮かべる言葉は「少年易老学難成」。研究者の世界に飛び込んでみたものの、成し得たことの小ささに茫然としてしまいます。そしてもう一つ「今はまだ人生を語らず」(わたし拓郎ファン!)。退職はひとつの区切りではありますが、学問に区切りはない！これからは狷介不羈！と思っています。

…34年間お世話になりました。



教授 山田 史生

教育学部
国語教育講座

遊びをせんとや生まれけむ

これは持論なのですが、ぼくは仕事とは仮面をかぶった遊びだとおもっています。だから無理をしてガンバっちゃいけない。つづかないから。

ガンバラないコツは、つらくない範囲で、すこしづつ反復することです。ただ反復するだけじゃいけません。楽しく遊びながらくりかえすのです。楽しく遊ぶことなくして真の仕事はできっこない。

遊んでばかりいるぼくを、37年間、弘大はほうっておいてくれました。

蕪村に「磯千鳥脚をぬらして遊びけり」という句があります。千鳥の実景じゃなくて、たぶん子どものころの思い出でしょう。ぼくも子どものころ、ズボンの裾をめくって川にはいり、ぴちゃぴちゃ水遊びをしたっけ。

弘大につとめたてのころ、父がなくなりました。教員の飲み会のあるとき、感傷的になっていたせいもあり、とらにいらした栗原靖先生にうっかり「死とはなんでしょう」とたずねてしまいました。いくら青二才とはいえ、一丁前の教員が酒席でする質問じゃない。でもつい口走ってしまいました。すこし時間がたってから、栗原先生はおっしゃりました。「山田さん、孔子はなんといっていますか」

ほろ酔いの頭で、ぼくは考えました。孔子の言葉とは「未だ生を知らず、焉くんぞ死を知らん」だろう(『論語』先進)。生きるとはどういうことかもわかっていないのに、どうして死ぬとはどういうことかがわかったりするだろうか。

身近なひとの死とむきあうことによって、現に生きているときのコミュニケーションの相手をみつめなおす。「いま・ここ」を生きているとはどういうことなのだろう。死んでからでは遅くはないかな、と栗原先生はおっしゃりたかったのかもしれない。

お別れにあたり、学生諸君にいつておきたい。

きみがまだ独身のうちは、自分を世界の中心において、まわりのひとを大切に下さい。それが自分を大切にすることになります。いつか家族をもったら、家族を世界の中心において、まわりのひとを大切に下さい。まわりのひとが、きみの家族をまもってくれます。

退職の日を迎えて

教育学部家政教育講座に被服学の教員として14年間お世話になりました。東日本大震災直後の赴任で、引越トラックは青森に入れず、宅配便のみで引越しました。単身赴任でしたので、1日24時間の使い方を自由に決められる天国のような日々でした。赴任前から機器分析センター(現共用機器基盤センター)が大変楽しみでした。実際に使用した機器はほんの数種類ですが、装置に向かっては無心になれました。自身の学生時代は被服学に5分野11名の教員がいる環境でしたが、ここでは私一人。学生との相談で決める卒研テーマは洗浄、染色、粒子合成、布の吸水性や伸縮性、子供服の変遷など多岐に亘りましたが、どの学生も教え子というより立派な共同研究者でした。地域共創科学研究科にも所属し、ふじりんごやスチューベンの果皮による染色や、りんご残渣の有効活用を考えました。弘前に来て覚えたこぎん刺しですが、教養教育等で630名以上の学生にこぎん刺しをマスターさせたことが私の弘前への一番の恩返しかもしれません。教育、研究活動の場を与えてくださった弘大、お世話になった先生方、事務職員の方々に心より感謝します。弘大の益々のご発展を今後は奈良の地から願います。



教授 安川 あけみ

教育学部
家政教育講座



教授 天坂 文隆

教育学研究科
教職実践専攻

悪戦苦闘と喜びの日々…感謝

令和2年4月、弘前市内の公立中学校を定年退職し、教職大学院の実務家教員として5年間お世話になりました。行政並びに中学校・小学校での管理職の経験はありましたが、教員養成に関わることになるとは思っていませんでしたので、教職大学院の授業、院生への研究指導は不安と手探りのスタートで、日々勉強の連続でした。担当業務には比較的早く慣れたのですが、やっかいだったのはやはり研究指導でした。私は数学教員ですが、担当院生は数学科だけとは限りません。院生の研究の関心は、学習意欲や自己効力感の向上、思考過程の把握、メタ認知、数学的モデル化、ヴィゴツキー、トゥールミン、ジョンソンの協同学習など多岐にわたり、一緒に勉強しながら気がつけばあっという間に5年が過ぎていました。一番苦しく一番楽しかったのがやはり、このゼミでの研究指導で、「学び続ける教員の姿」を見せることはできたのかな…と思っています（笑）。また、教採支援ができたのもうれしく思っています。

院生の教育に対する熱い思い、研究者の先生方の高い識見に、多くの元気と学びをいただきました。感謝申し上げますとともに、弘前大学の益々の発展をお祈りしております。

これまでに感謝を込めて

栄養士になろうかと迷っていた学生の頃、ある方から「今やっていることを続けなさい！先生と呼ばれるときに訪れます。苦労はあるけれど60歳までやり遂げられます。諦めずに続けなさい」…この言葉が、栄養士になるきっかけとなりました。

平成10年度より、教育学部の附属3校園で栄養士・栄養教諭として学校給食に携わり、令和6年度、晴れて退職の日を迎えられました。私の本務は、栄養教諭としての食育、安全安心な給食提供、栄養管理でした。多くの幼児、児童、生徒に、自分が考えた給食を提供できたことは私の誇りです。給食を食べて育った子供たちの活躍する姿を拝見できたこと、猛暑が続く季節や、人手不足の中もチーム一丸となって給食を提供したことは一生忘れられません。その経験が、次のステージへのお守りとなっています。

何も持たない私が働き続けられたのは、大学の附属学校という学びの場や仲間にも恵まれ、多くのことを学ぶ機会を得られたからです。在職中は何事か成し遂げたのかと、何度も自問自答することもありましたが、今は胸を張って「私の専門は学校給食です。子供たちの給食の先生でした」と言えるようになりました。

お世話になった方々へ、心から感謝申し上げます。あの「続けなさい」の言葉以上に、多くの支えと励ましをいただきました。これまでに感謝を込めて…ありがとうございました。



栄養教諭 西谷 倫子

教育学部附属特別支援学校

弘前での44年間を振り返って

私は父が転勤族だった関係で、小学校卒業までに鹿児島から北海道などを転々としていました。中学・高校・浪人時代は仙台で過ごし、1981年に弘前大学医学部に入学しました。卒業後は直ちに耳鼻咽喉科に入局しましたが、その後の人生を含めて弘前を離れたのは関連病院での1年3か月と海外留学1年間だけです。40年以上を弘前で過ごしたことになります。

2004年に始まった初期臨床研修制度の影響もあり耳鼻咽喉科への入局者数が激減する中、2014年の夏に講座を引き継ぐ形で教授を拝命して最大の課題である人手不足に取り組むことになりました。実際に2015年は自分を含めて講座には7名、また多くの基幹病院で常勤医が1名しかいないなど青森県の耳鼻科医療崩壊の危機が迫っていました。しかし私の教授就任後には、大学のスタッフや基幹病院の部長が学生や初期研修医の指導に積極的に携わり、2016年から5年間の間だけでも3、3、6、3、4名と立て続けに耳鼻咽喉科専門医を目指す仲間を増やすことが出来ました。「人は城、人は石垣」と言いますが、この10年間で青森県耳鼻科医療を担う重要な砦を築くことに貢献できたと考えています。

在任中は皆様に大変お世話になり、心から感謝申し上げます。退職後も青森県の耳鼻咽喉科医療に力を尽くしたいと考えていますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。



教授 松原 篤

医学研究科
耳鼻咽喉科・
頭頸部外科学講座

シグナルとノイズ

私は、1985年弘前大学医学部卒業と同時に、鈴木壽夫先生が主催する医学部第二生理学講座の助手となりました。当時、網膜にspotlightを射てて、前頭葉の神経活動を記録するシステムを構築中でした。そこで原始的なprogram言語を学びました。その後、臨床研修を経て1989年、本院第一内科医員となりました。ある日旧診療棟の内視鏡室に、巨大な画像解析装置があることを知りました。「画像の自動診断ができるかも知れません」と棟方昭博先生に告げると「面白そうだな」。以来、病変の特徴抽出に憑りつかれましたが、診断精度となると実用からは程遠い苦悩の日々が続きました。医療情報部長に着任した2012年、畳込みニューラルネットワークが世に出ました。その手法による病変の分類精度は驚嘆すべきものでした。このことは、人が経験的に排除するノイズの中に、分類のkey情報(シグナル)が含まれることを意味します。一方、地域医療を支援する技術として、電子カルテ同士のLANケーブルを介さない(ランサム耐性)接続が実現しつつあります。実現の暁には、内製した様々な推論システムの共有も可能となります。これまで、ご支援いただいた医学研究科・附属病院の教職員の方々に心より感謝申し上げます。



教授 佐々木 賀広

医学研究科
医学医療情報学講座



准教授 森 文秋

医学研究科附属
バイオメディカル
リサーチセンター
脳神経病理学講座

弘前大学に感謝

1989年に、弘前大学に転任してから、36年の歳月が流れました。振り返れば、「神経難病」研究における数々の挑戦と発見の日々でした。特に、上司の指導と同僚の支えがなければ、ここまで続けることはできなかったでしょう。上司の厳しくも温かい指導および同僚の支えは、私の成長の糧となりました。

2006年に、スペインに研究留学する機会を得て、異文化交流の素晴らしさを実感しました。ランチでの研究者たちとのディスカッションは、私の視野を広げ、新たな研究の方向性を見つけるきっかけとなるとともに「危険な体重増加」をもたらしました。異国の地での経験は、私の研究人生において忘れられない思い出です。

2024年6月に、急性心筋梗塞を発症し、附属病院で手術を受け、九死に一生を得ました（「危険な体重増加」が原因なのか不明ですが）。この臨死体験を通じて、病院スタッフへの感謝とともに、生命の尊さと人間の脆さを深く理解することができました。この体験は、今後の人生にも大きな影響を与えることでしょう。

退職に際して、これまでの経験と知識を次世代に伝えることが私の使命だと感じています。これから、研究の道を歩む若い世代を応援し続けたいと思います。皆さま、本当にありがとうございました。

徒然なるままに...

退職に際し振り返ってみると、この33年間に所属講座だけでも5回は変わりました。この間、大学のみならず、世の中も大きく変遷してきました。

例えば、インターネットの普及に始まる情報化社会の到来とともに、世界の距離が短縮化され、メディアやビジネスなど社会全般に大きな変化を与えました。一方で、SNSによるフェイクニュース、誹謗中傷、トクリュウ等の横行も社会問題化しています。インターネットが、情報の自由・開放の象徴であった事を考えると皮肉な話です。さらに、生成AIの登場はあまりにも大きなインパクトがあり、正直、教育の現場ではまだ消化しきれていません。

またLGBTQやハラスメント等の問題は、昭和の感覚とは大きくかけ離れた、常識が常識でない、一歩誤ると一発退場、といった常に緊張に曝されています。この感覚は世代ごとに違う所でしょう。正直な所、これまで世代間ギャップはあまり感じていませんでしたが、最近では嫌でも痛感しています。

さらに風呂敷を広げると、ロシア、中国、アメリカ等の覇権争いの再燃、といったこれまで第二次世界大戦後に培ってきた世界秩序・民主主義等に対しての揺れ戻しが来ており、王政復古的な状況です。

このような状況で気になるのが「生物は繁栄と絶滅を繰り返すが、絶頂期・爛熟期に入るとその種は絶滅する」で、人類は既に爛熟期にいるのではないのか、という疑問・妄想です。まあ、いつの時代も先達の方々は同様の事を考えていたのだらうな...と想いつつ。どうもありがとうございました。

講師 松谷 秀哉

医学研究科附属地域
基盤型医療人材育成センター
医学教育学講座



教授 伊藤 巧一

保健学研究科
生体検査科学領域

弘前大学での教員生活を振り返って

2006年4月に着任し、弘前大学で19年間の教員生活を定年まで続けられたことは私の幸せであり、誇りでもあります。神奈川県から着任した当時は、こちらに知り合いもなく不安であったこと、近所のおじいちゃん、おばあちゃんから強烈な津軽弁の洗礼を受けたことが懐かしく思い出されます。元々、教育にはとても興味がありました。着任当初は、張り切って授業スライドや資料を準備し、なるべく多くの情報を伝えようとしたのですが、結果として惨敗でした。それは単に自己満足に過ぎず、学生さんの立場に立っていないものでした。授業評価アンケートが私にそのことを教えてくれました。定年を迎える今も完成された授業とはいきませんが、医療人育成の一助になっていたならば本望です。大学を去るにあたって、学生の皆さんには次のことをお願いしたいと思います。現在、少子化、高齢化社会、異常気象、物価高騰、食不足、感染症の蔓延など社会生活を営んでいく上でいろいろな困難に直面しています。これら問題解決のために一体自分には何が出来るのか、一度真剣に考えてみてください。皆さんの進むべき道が開かれるかも知れません。退職後、私としては弘前大学での教員生活のすべてを心にとどめ、これから残りの人生を精一杯楽しみながら生きていきたいと思っています。弘前は本当に住み心地のいい土地でもありました。

最後に、弘前大学の益々の発展と皆様のご健康をお祈りいたします。これまで本当にありがとうございました。



教授 小山内 隆生

保健学研究科
総合リハビリテーション
科学領域

37年間をふり返って

私が弘前大学医療技術短期大学部作業療法学科に助手として赴任したのは昭和63年4月でした。以来、37年間、作業療法士教育と研究に関わってまいりました。弘前大学医療技術短期大学部に作業療法学科が設置されたのは昭和55年4月で、金沢大学医療技術短期大学部に続く2番目の文部科学省による作業療法士養成教育機関でした。赴任当時の作業療法士数は全国で3500人程度であり、作業療法士の認知度は非常に低いものでした。令和7年現在12万人に迫る状況を鑑みますと隔世の感があります。赴任当時は、教育研究については未経験のことが多く、戸惑うことが多々ありました。このような状況でありましたが、周りのスタッフの協力や援助のもと、約800名の作業療法士を養成することができました。

その後、弘前大学医学部保健学科への改組（平成12年）、弘前大学大学院保健学研究科修士課程の設置（平成17年）、同大学院保健学研究科博士課程の設置（平成19年）を経験し、現在に至っております。この大学でのさまざまな経験がどれも貴重で忘れることのできない思い出となっております。このたび、定年退職を迎えるにあたり、弘前大学に対する感謝を表しますとともに弘前大学の更なる発展を祈ってお別れの挨拶といたします。



教授 片岡 俊一

理工学研究科
地域環境防災学科

東日本大震災リレーシンポジウムとそのルーツ

定年までの3年間は研究科長を、その前の2年間は副研究科長を務めていたので、地域共創科学研究科の話を書こうと思う。

地域共創科学研究科は「文理共創」、「域学共創」という理念をもって、2020年（令和2年）に発足した。発足の準備をしている頃には、2020年の夏前に発足記念の行事を行うことを議論していたような気がするが、コロナ禍になり、4月以降はそれどころではなかった。

一方で、私としては翌年（2021年）の3月で東日本大震災から10年になるので、何らかの行事を催したかった。そこで、研究科の発足行事と震災の節目の行事を合体して実施することを曾我研究科長に提案したのは夏を過ぎたころかもしれない。震災そのものの研究、復旧、復興にかかわることは一つの学問分野で収まることはなく、多くの知が必要と考えたからである。関係する研究科長、学部長の了解を得て、10年目の節目の日である2021年3月11日を跨いで、2021年1月から5月の間でリレーシンポジウムは開催された。

リレーシンポジウムを思いついたのは、東日本大震災直後から檜横貢地域社会研究科長（当時）のリードで開催されていた震災研究交流会があったからである。さらに、この研究会の背景には1983年日本海中部地震の後に全学的な規模でまとめた報告書を作成した事実がある。弘前大学は総合大学として災害の研究を行う素地を早い時期から持っていた。今後も、その意識が継承されることを期待している。



准教授 丹波 澄雄

理工学研究科
電子情報工学科

退職を迎えて

平成10年に隣の岩手大学から赴任し、27年が過ぎようとしています。総合情報処理センター、今の情報基盤センターの専任教員として、情報リテラシー教育、システム構築、ネットワーク関係の研究を行ってきました。改組絡みで平成15年に電子情報工学科に移動することになり、学生達と一緒に研究ができると期待していたのですが、10月からの移動だったので、翌年まで指導学生がいない状態でした。

最初の4年生は全員大学院に進学したので研究室は活気のある状況になり、色々なテーマに挑戦しました。私の研究分野はリモートセンシングで主に衛星画像を用いますが、対象となる地上の情報が必要なので、地上のデータを収集するためにフィールドを歩き回ります。特に衛星画像から玄米タンパク量を推定する研究では、水田の中にマーカーを設置し、その場所の稲を刈り、脱穀、精米、粉碎、サンプル抽出、分析、衛星画像との突き合わせ解析という一連の作業を行い、コンピュータ関係学科の学生達が農学生命科学部の学生に負けない経験をしていました。研究対象が地表の事物なので、地域との関わりが欠かせません。リモセンでは地理情報も必要なのでGIS(地理情報システム)を利用した研究として、不法投棄地域の推定を取り上げ、山中の細い山道を走り回りゴミ探しをしたものでした。また、リモセンでは観測に同期した実測データ(気象や環境情報)が必要であり、IoT技術が適していることが判りました。そこで研究室総出で出始めのRaspberry Piという名刺サイズのコンピュータを使い様々なIoTシステムを作ってきました。その蓄積の下、IoTの地域への応用として、弘前さくらまつり駐車場情報公開社会実証実験、弘前ねぶたまつり位置情報発信社会実証実験を研究室の総力を上げて実施し地域貢献の一助となりました。

学生達と力を合わせて地域に役立つ研究を様々な人々に支えられながらこれまで続けてこられたことに深く感謝しています。これからの変化が大きい社会、弘前大学がしっかり受け止めて大きく発展してゆくことを祈念しております。



教授 黒尾 正樹

農学生命科学部
生物学科

教員生活の終わりにあたって思うこと

今となってはご存知の方も少なくなっていると思いますが、稀代の落語家 林家三平 師匠が、“身体だけは大事にしてください”と高座でお話になっているのを子供の時分にテレビでよく見たものでした。のちに三平師匠ご自身が、肝臓癌でお亡くなりになってしまうのですが、当時はそんなことは露にも思わず、ましてや、教員生活が終わろうとしている頃に自分自身が重篤な疾病に侵されるとは想像だにしませんでした。今になって振り返ると当然の帰結と思うのですが、知らず知らずのうちに自分を追い詰めていた私には、先のことなど考える余裕はありませんでした。

定年まで1年半を残すばかりとなった一昨年の9月でした。依頼のあった仕事を懸命にこなしていたところで、ちょっとした不幸に見舞われました。常用していた薬の生産調整に遭い、鬱病が急速に悪化したのでした。悪いことは続くもので、昨年10月には脳梗塞を発症しました。まさに、“弱り目に祟り目”です。幸いなことに早い段階で適切な治療を受けられたので、後遺症はほとんどなく回復したのですが、身体は正直なもので、無理をすれば必ずその報いに遭うことを思い知りました。

ご自分の体力に自信があるという貴方に、声を大にして申し上げます。

“身体だけは大事にしてください”

退職にあたって

赴任したのは1993年、あれから32年が経った。人生の半分をこの地で過ごしたことになる。期待と不安を抱えて教育・研究を開始した当時の思いを微かに覚えている。光陰矢の如し、32年があっという間に過ぎ去った。その間、数は多くないものの、何度か思いがけない発見があり、感動を周りのスタッフや学生と分かち合った。研究論文の作成には苦労したが、採択された時の喜びはひとしおであった。

30年以上携わっているものの、教育は難しい、といまだに思う。学問の面白さを伝えることができれば大成功だと思うのだが、それをうまくやるのは容易でない。先人たちは身の回りの些細な現象を観察し、「なぜ、どうして」と不思議に思い、それを解決しようとする中で科学を発展させ、それをもとに技術を発展させてきた。今、それを当たり前のように学校で習う。それを盲目的に信じ、記憶すれば高得点が取れる。そこには科学の心はないし、そこからはたいした技術は生まれない。「なぜ、どうして」を追求するどこかで納得することもあるが、次の「なぜ、どうして」にぶち当たり、どこまで行っても納得できないかもしれない。それでいい。ここに学問の原点がある。師匠や先輩たちに教わったこの感覚を次世代にどの程度伝えることができたか、今、自問している。



教授 姫野 侑太

農学生命科学部
分子生命科学科

弘前大学での24年間

私は大学卒業後、農水省の試験場に就職して桑栽培の研究に従事し、「桑博士」になりました。しかしその間、養蚕業の衰退により研究組織が何度も縮小され、学界も高齢化して活気がありませんでした。その後研究テーマが果樹の気象生態に変わり、縁あって2001年に弘前大学の農場専任教員になりましたが、専門替えして日も浅く、農場実習を含む教育業務は未経験であり、着任当初は不安で一杯でした。その私が今、24年間の教員生活、43年間の研究者生活を全うしようとしています。周囲の皆様から暖かいご支援を頂いたお陰であり、感謝の気持ちで一杯です。農場教員は卒業研究を担当しないので研究室らしい組織がなく、農水省時代と比べれば研究費も限られました。しかし、青森県で生産者の期待を感じながらリンゴを研究出来ることは、週刊誌に「蚕に群がる公務員」と叩かれながら桑を研究していた若い頃とは全く違う喜びでした。農場実習も、一生懸命取り組みればやりがいを感じられる授業科目でした。その上、本学に着任してから農場を利用する有能な共同研究者に恵まれて、次第に外部資金を獲得できるようになり、最後はリンゴ園の気候変動影響をテーマにした大規模なプロジェクト研究に取り組ませて頂きました。

今後の弘前大学の発展を心よりお祈り申し上げます。



教授 伊藤 大雄

農学生命科学部
附属生物共生教育研究
センター

定年退職を迎えて

昭和63年4月に弘前大学医学部附属病院検査部に入職し、37年間勤務させていただき無事退職を迎えることとなりました。多くの皆様に支えられてこの日を迎えられたことに感謝いたします。37年間の検査業務では、生理検査業務以外の全ての検査業務を経験することができました。入職した旧中央診療棟時代は、中央採血室は無く、採血は主に各診療科で実施しておりました。ただ、一部出血スクリーニング検査としての採血業務を検査部血液検査室で実施していました。採血の際、血管のあまりよくない方もおられ何度か採血し直したりして慣れるまで大変苦労したのを憶えています。平成12年4月に現在の中央診療棟に移転しましたが、移転前は検査業務の合間に検査室の設計や機材の配置を考えたりと忙しい日々を過ごしました。平成31年1月より臨床検査室の国際規格であるISO15189取得の準備を開始しましたが、品質管理者として中心的な役割を果たすことができました。無事に審査を終え、令和3年7月にISO15189認証取得することができました。37年間の振り返ってみると楽しかったことや辛かったこと様々思い出されますが、良き先輩、後輩に恵まれなんとか無事に過ごして行くことができました。これまでお世話になった皆様に感謝し、今後も弘前大学の更なる発展を心よりお祈りいたします。



副臨床検査技師長

蔦谷 昭司

医学部附属病院医療技術部
検査部門



副看護部長
木村 美佳

医学部附属病院看護部

なが〜い「弘前大学」とのお付き合い

一生のほとんどを弘前大学で過ごしたといっても過言ではない。学区ではない附属小・中学校にはるばる電車に乗って通った。小学校では複式学級といって、5年生と6年生と一緒に勉強するクラスになり、とにかく学校に行くことが楽しかった。

高校卒業後、就職するか否かで悩み、まだまだ学生を満喫したいとの思いで弘前大学教育学部に入學した。しかし、大学での講義は、看護に関するものばかりで、すでに違う道に迷い込んでいたことはその時知る由もなかった。看護実習は、とにかく嫌いだったが、とりあえず看護師をやってみようと思い大学病院に就職した。

忙しい病棟ばかりに配置となり、大変だったが楽しかったことだけが思い出される。

時の流れに身を任せ、看護師長、さらには副看護部長の役職に命ぜられ、長く教育という分野に携わってきた。これまで働き続けることができたのは、皆さんの助けがあつてのこと、出会った方々に感謝の気持ちを込めて心から、『ありがとう』を伝えたい。

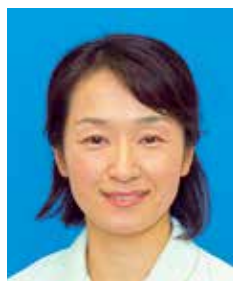


副看護部長
鹿内 はるみ

医学部附属病院看護部
第二病棟 7 階

38年分の感謝

「手に職をつけなさい」この言葉をきっかけに看護学生となった私は、昭和62年弘前大学に入職し、以来38年間お世話になりました。いつの間にか手ではなく、心に職をつけたような思いであり、これも導き支えてくださった皆様のおかげと感謝しております。入職当時、今のような教育研修や整備された手順書はなく、日々書き留めたメモを頼りに緊張の毎日を送っていました。しかし、多忙な臨床現場のなかでも、置き去りにすることなく多くのことを指導してくれた先輩達の支えは、複数異動したどの部署でも変わることはありませんでした。地域包括ケアシステムが重視されるようになった2015年には、初開催となる看護実践者育成研修を受講する機会を得ました。他病院や介護事業所と交流し退院支援に取り組んだ経験は、高齢者の入院が増加している現在、私にとって大きな力となっています。思い返せば瞬く間に歩み過ぎた道程でしたが、無事に定年退職を迎えられた安堵感とともに満足感に包まれています。ありがとうございます。



看護師
佐々木 香奈子

医学部附属病院看護部
入院棟東 3 階

定年退職を迎えて

昭和61年4月に入職し、脳神経外科、神経科精神科と経験させて頂き5年目で退職しました。その後平成9年に再就職し、数年のブランクがありましたが諸先輩方々に暖かく支援していただき、小児科で勤務することができました。この度定年退職を迎え、これまで多くの皆さまに支えて頂き深く感謝申し上げます。

小児科では、たくさんの患児や家族との出会いや思い出がありました。また悲しい別れもありました。患児が5歳の時に骨髄移植をうけ、退院後15年ぶりに20歳になった患児と再会した時は、成長した姿に感動し、嬉しくて再会を喜んだことを思い出します。また、私の子どもと同世代の患児に感情移入することもたびたびあり、母親のような気持ちで接していたことも思い出されます。治療に頑張る子どもの姿、見守る家族の姿に少しでも支援ができたという思いで勤めてまいりました。辛い治療の中でも、患児は治療に頑張る笑顔で私に癒しを与えてくれ、元気をもらいその姿に励まされました。私を患児と共に成長させてくれた小児科で27年間勤務することができ、よい人生を送ることができました。

長い間お世話になりました。そしてこれまで本当にありがとうございました。これからの弘前大学の益々の発展を心よりお祈りいたします。



副看護部長
浅利 三和子

医学部附属病院看護部
入院棟東 6 階

定年退職を迎えて

平成6年に弘前大学医学部付属病院に勤務させていただくことになり、血液内科膠原病消化器内科病棟に配属となりました。当初は、山形出身の私にとって津軽弁は、多言語のような独特な言葉で、別世界に置かれているような印象がありました。それでも患者様の入院生活をサポートさせていただく中で様々なことを学びさせていただき、周囲のスタッフの方々にも温かく見守っていただきながら、看護師として育てていただいたという思いです。その後、平成15年に心臓血管呼吸器外科病棟に配属になり、重症度の高い患者様がほとんどで、業務も複雑であることから毎日が疲労困憊でしたが、なぜか達成感とやりがいを感じることはできたのは、医師・看護師が一緒になって取り組むことができたからで、チーム医療の力を実感しました。

平成19年がん基本法が策定され、当院のがん診療連携拠点病院指定を機に、緩和ケアチームが立ち上げとなり、チームの看護師として活動を行い、令和2年からは、腫瘍内科外来で勤務しながら緩和ケアの普及に努めさせていただきました。看護人生を振り返ると周囲の人たちに本当に恵まれ、定年まで勤めることができたことと感謝しております。弘前大学の更なる発展をお祈りいたします。ありがとうございました。



副看護師長
飛内 さとみ

医学部附属病院看護部
入院棟8階

定年退職を迎えて

昭和61年4月に看護師として入職し、39年間勤務させていただきこの春定年退職を迎えることとなりました。多くの皆様に支えられこの日を迎えられたことに深く感謝いたします。

私は新人として眼科で9年勤務後ICUに8年半勤務しました。あの頃は手術部・救命・ICUが合同体制で、救急対応のためポケベルを携帯しいつ連絡が来るとドキドキしながら自宅待機していた時代でした。春はアルコール中毒、それ以外はAMIの対応がほとんどで、処置対応を行い朝方に帰宅する事もしばしばでした。病院を出て帰宅する際にみた朝日がきれいだったことを今でも思い出します。その後結婚・出産を経て復帰後は整形外科に4年半勤務しリハビリテーション科にも勤務させていただきました。その後は泌尿器科・歯科口腔外科に8年半勤務し、最後は神経精神科に勤務交代となり現在に至ります。

定年を迎えるまでにはたくさんの出会いがあり、またたくさんの経験をさせていただきました。看護をする中で受け持った患者さんとの関わりの中から命の大切さを知り、生きるという意味とは何かを考えさせられ、看護師も無力な一人の人間なんだと思い知らされたり、これらは自分の生き方や今後の人生の指標として心に刻まれていくと思います。

つらい思いをしたことも多く何度かやめようと思ったこともありましたが、先輩方や後輩の皆さんが優しく声をかけてくださり話を聞いてくださったことや家族の支えがあったからこそ今この時を迎えることができたのだと深く感じています。

定年後はどうしていくべきかをよく考えながら第二の人生を歩んでいこうと思っています。長い間ありがとうございました。



准教授 多田 恵実

教育推進機構

みなさん、ありがとうございました

2007年から英語非常勤講師として、2013年の着任以降は国際教育と教養教育に所属、英語科目教員として、多くの先生方や、学生、職員、地域の皆さんと出会う機会に恵まれました。皆さんが私の師となり、多くのことを学びながら、人に恵まれた充実した日々を送ることができました。大学院修了後、東京で外資系企業に勤務した後、主人の赴任を機に青森市で教鞭をとり始め、看護学校や大学で非常勤講師を務めた後、大好きな故郷、弘前に家族と共に戻ることができるなんて思いもよりませんでした。2012年に創設された弘前大学イングリッシュ・ラウンジでは、中村裕昭教授から国立大学の使命を、シャーリー・バーマン准教授には学生を育てる姿勢と意義を学びました。イングリッシュ・ラウンジは複数の教員が協力し運営する、大学には珍しい教育施設。教員と学生・留学生が直接に交流できる場として、まるで海外留学のような環境を提供しています。授業は基より、机上のみでは得られない学生自身の体験を通じた学びの場がこれからも続くことを願っています。昨年末、中学・高校からの同級生だった故郷藤子教授・前医学部保健学科研究科長の突然の死は私にとって大きな衝撃でした。共に「退職にあたって」を書いていた筈なのにと残念でなりません。思い出を胸に刻み、これまでの出会いと学びに感謝の気持ちを込めて、皆さん、ありがとうございました。



部長 古舘 賢樹

研究推進部

退職にあたって

昭和58年に弘前大学に国家公務員として採用され、平成16年の国立大学法人化を経て、弘前大学に42年間（うち3年間は放送大学青森学習センター）勤務し、多くの業務を経験させていただきました。

私の業務経験の中で、仕事に対する取り組み方として大きな契機となったのは、平成16年の入試業務の一元化でした。従前、全学入試の取りまとめのみを行ってきた入試課が、文京町の学部・研究科の入試業務の計画・実務を行うことになり、新たな実施方法を構築する必要がありました。10月に発足したばかりの入試課では、係長を含め職員6名で協力し大学院入試から大学入試センター試験（当時）、個別学力検査を実施しました。この時に、初めてチームで業務を行うことの重要性を学びました。目的を明確にし、チーム全体で取り組めば、目標を達成できることを学んだ時間でした。

その後、平成21年に放送大学青森学習センターのコラボ弘大への移転、平成23年の東日本大震災における、「被ばく状況調査チーム」の一員として福島への派遣、その後の「同チームの派遣」及び「一時立ち入りプロジェクト」の教職員派遣業務の統括、同年12月のチェルノブイリ（現チョルノービリ）原発事故現場の視察を含むウクライナ派遣団の取りまとめ及び参加、平成25年の食料科学研究所の設置、令和3年のコロナワクチン職域接種等、ルーチン業務以外の、様々な事業の企画・立案及び実施に携わってきました。

これらの全てに言えるのは、何れの事業も一人ではできなということです。大学の事務組織は、良くも悪くも縦割りになっています。最近の事業では複数の部局に関係するものが増えているように感じます。新たな事業を進めるためには、多くの知識・経験を有する関係部局の職員が協力することにより、ベストな方法を探索することが重要です。

近い将来、大学にも大きな変革期が来ると考えられます。その時は、職員が力を合わせて部局の壁を越え、一体となり困難な状況を克服してください。やればできます。

最後に、在職中にご指導、ご鞭撻を賜りました多くの教職員の皆様に感謝申し上げます。

こんなことやってます！

CLOSE-UP

研究室紹介



防災・減災に資する
研究成果の創出を
目指して

理工学部

地球環境防災学科
防災地質学研究室

教授 梅田 浩司



研究員のメンバー

1. はじめに

理工学部地球環境防災学科は、天文学・地質学・岩石鉱物学・固体地球物理学・気象学・防災工学などの幅広い分野の教育・研究を現在16名の教員で担当しています。学生は3年次後期になると、3研究グループ、10研究室に配属され、卒業研究に取り組むことになります。当研究室は2016年4月に発足し、今年度で9年目になりますが、この間に46名の学生の研究指導に携わってきました。現在は3年生6名、4年生5名、博士前期課程3名、博士後期課程1名の15名の学生が所属しており、当該学科の中では比較的大所帯な研究室です。ここでは地質ハザード（ジオハザード）をキーワードとして、地震・津波、噴火、洪水、地すべりなどの発生時期や規模の特定、自然災害のメカニズムの解明およびそのハ

ザード評価といった防災・減災に資する研究成果の創出を目指しています。学生の研究テーマは基本的に自由に設定できますが、初めは他の学生が進めている研究のほか、現在進めている筆者の科研費の研究や他大学との共同研究などにも従事してもらい、自身の興味のあるテーマを絞り込めるようにしています。また、昨年8月には電源開発株式会社と共同で理工学研究科東北日本地盤災害研究講座を開設しましたが、大学院の学生は、企業とのプロジェクト研究にも分担研究者として積極的に参画しています。

2. 研究内容

2.1 深部流体に関する研究

地下水の起源のほとんどは天水（降水）ですが、地球の中から絞り出されてくる水、深部流体が混入している場所も

あります。深部流体にも様々な種類（成因）があるといわれていますが、その大半は日本列島のような沈み込み帯において、沈み込む海洋プレートが高温・高压

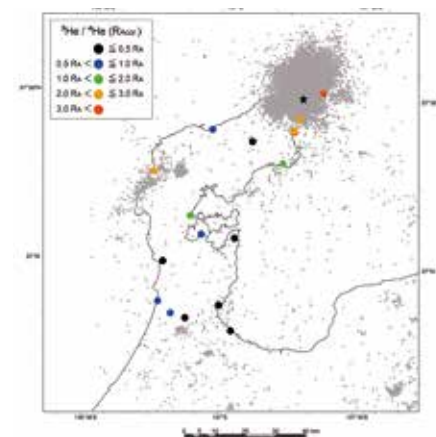


図1 能登半島のヘリウム同位体比 ($^3\text{He}/^4\text{He}$ 比) の分布

R_A は大気中の $^3\text{He}/^4\text{He}$ 比 (1.4×10^{-6}) で $3.0R_A$ は溶存ヘリウムの同位体比が大気の3倍であることを示している。星は2024年1月1日の能登半島地震の本震、灰点は2020年1月1日～2023年12月31日に発生した群発地震の震源を示す。

状態になり岩石に含まれる含水鉱物から脱水した水と考えられています。プレートから脱水した深部流体は大陸（上盤）プレートに向かって上昇していきますが、その過程で地殻変動や地震活動を引き起こしている可能性が指摘されています。当研究室では2024年能登半島地震（M7.6）の発生する4ヶ月前に震源周辺において地下水の採取を行い、そこに含まれるヘリウム同位体を測定しました（図1）。その結果、深部流体によって地下30km以深のマントルから地表に運ばれる ^3He フラックスを計算したところ、 $2.1\sim 4.5\times 10^5\text{ atoms/m}^2/\text{sec}$ といった高い値が得られました。この値は、1906年サンフランシスコ地震（M7.8）、1999年イズミット地震（M7.4）、2009年ニュージーランド西岸地震（M7.8）などの大地震を引き起こした断層の周辺で観測された値と同程度でした。このことは、 ^3He などのマントル物質を含む深部流体の分布やフラックスを明らかにすることにより、大地震の発生ポテンシャルの高い地域を予め把握できることを示唆しています。

2.2 イベント堆積物に関する研究

突発的な事象により地質学的な時間スケールに比べて瞬時に形成された堆積物を総称したものをイベント堆積物と呼びます。例えば、地震に伴う津波によって海から運ばれた堆積物は津波堆積物、洪水によって河川の上流から運ばれた堆積物は洪水堆積物といいます。当研究室では主に秋田大学、産業技術総合研究所などと共同で東北地方の日本海側において、千年～数百年前に形成された（歴史地震に伴う）津波堆積物の調査を精力的に実施しています。その結果、日本海側では季節風によって太平洋側に比べて砂丘の発達が著しく、海岸線から直接、陸域に津波が遡上することは稀で、一般には河川や潟湖（ラグーン）を遡上し、堤防から越水して被害を及ぼすことがわかってきました。特に、潟湖では湖沼内に津波堆積物が残りやすこともわかり、1741年の渡島大島の噴火に伴う寛保



図2 一ノ目潟におけるイベント堆積物の調査風景

津波の堆積物を十三湖で、1804年の象潟地震に伴う津波の堆積物を古象潟湖で発見しました。また、男鹿半島の一ノ目潟では1983年日本海中部地震に伴う湖内で発生した混濁流堆積物を見出しました（図2）。また、災害時の緊急調査も併せて実施しており、2018年北海道胆振東部地震の地すべり、2019年台風19号における宮城県丸森町の斜面崩壊・土石流、2022年8月前線豪雨による岩木川支流の中里川の破堤、2024年能登半島地震の津波などの現世のイベント堆積物の調査を行い、その成果は関連学会を通じて発信しています。

2.3 新たな火山活動モニタリング手法の構築

低周波地震は地下深部でのマグマの移動・蓄積や噴火に至る準備過程など反映している地球物理学情報です。一方、マグマから放出されるガスのうちヘリウムや炭素のフラックスが噴火前に大きくなることが報告されており、マグマ活動を捉える上での有効な地球化学情報と考えられます。当研究室では、北海道南西部の鹿部間欠泉および湯の川温泉の温泉ボーリングから放出される遊離ガスを2020年の8月から1か月に1回のペースで採取し、その同位体の分析を行っています。これまでに約5年間のデータが蓄積されており、フラックスの変動と通常地震・低周波地震との相関について検討を進めています。現時点では通常地震が発生すると放射壊変起源ヘリウムが、低周波地震が発生するとマグマ起源ヘリウム・炭素が増加することが分かっています。これらの研究を継続・発展させることによって、気象庁が常時監視・観測

を行っている50の活火山以外にも適用できる、簡便かつ安価な新たな火山活動のモニタリング手法の構築を目指しています。

3. 研究成果の発表、進路など

研究室の運営にあたっては、文科省や経産省から多くの予算（税金）を使用させていただいています。したがって、研究成果は目に見える形で社会に還元する必要があります。そのため、卒業研究については毎年12月に開催される東北地域災害科学研究集会における口頭発表、修士研究についてはアメリカ地球物理学連合（American Geophysical Union）における英語での発表と査読付論文への投稿を学生に課しています。最初の頃は半分くらいの学生しかできませんでしたが、今では殆どの学生がノルマを達成しており、所属する学生のスキルも着実に向上していると感じています。

学生の進路については、大学・国立研究機関のほか、電力・ガス業、建設業（地質コンサルタントも含む）、鉱業、サービス業と続きますが、進学しない学生の多くが公務員（特に県庁・道庁、教員）の道を選ぶといった傾向もあります。

4. おわりに

当研究室では日頃の教育・研究活動（フィールドワーク、室内試験、ディスカッション、プレゼンテーション）を通じて、環境問題や自然災害などの諸問題を理解できる基礎的能力と倫理観、幅広い地球科学的教養を身につけ、社会の様々な領域で活躍できる人材の育成を目指しています（あくまで理想ですが…）。ここで紹介した研究内容や研究室の雰囲気などに興味のある方は気軽にお越しください。



TOPICS

令和6年度弘前大学学生表彰を実施



福田学長（前列右から4人目）と受賞者ら

研究活動、課外活動等で活躍した学生及び学生団体を表彰する学生表彰表彰式を令和7年3月4日（火）大学会館3階大集会室で行いました。

今回の受賞者は、課外活動で活躍した2団体と研究活動や課外活動等で活躍した学生20名で、福田学長から学生1人ひとりに表彰状と記念品が贈呈されました。

福田学長からは、各学生の功績をたたえ、「皆さんの活躍は、本学の名声を高めるだけでなく、他の学生に対する大きな刺激になったと思います。今回の受賞を自信にして、残された大学生活の中で、また卒業・修了予定の方は新天地において、さらに研さんを積まれることを期待します。」との言葉が送られました。

受賞者を代表して、医学部医学科3年 相馬謙盛さんが、「私たち弘前大学の学生が、非常に恵まれた環境に身を置かせていただいていることを実感するとともに、大学の名に恥じぬよう、たゆまぬ努力を続けていかなければならない、と身が引き締まる思いです。今後も、弘前大学の学生であるという誇りと自覚を胸に、各々の道で、さらなる活躍を目指し、一心に努めて参ります。」との謝辞を述べました。

なお、受賞者には、ネットワンシステムズ株式会社奨学基金により、活動奨励費が給付されました。

団 体

■課外活動で特に顕著な功績があった団体

医学部ラグビー部
医学部水泳部

個 人

■研究活動で特に顕著な成果を挙げた学生

保健学研究科2年	佐々木 風 輝
理工学研究科博士後期課程修了	張 娟
理工学研究科博士後期課程3年	楊 自 遠
理工学研究科博士後期課程2年	YUSRIN RAMLI
理工学研究科博士後期課程3年	工 藤 龍 也
理工学研究科博士後期課程2年	今 津 毅 士
農学生命科学研究科1年	小 山 和 士
農学生命科学研究科2年	早 坂 拓 海
農学生命科学部卒業	秀 健 吾
農学生命科学研究科2年	安 田 晶 南
農学生命科学研究科2年	生 沼 悠 希
農学生命科学研究科1年	時 崎 太一郎

■課外活動で特に顕著な功績があった学生

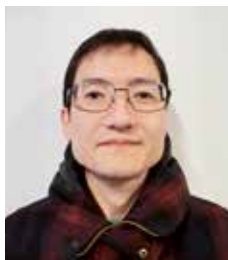
医学部医学科4年	安 藤 舞 佳
医学部医学科2年	安 達 秀太郎
教育学部4年	三 上 京 史
理工学部4年	山 本 友 哉
理工学部4年	岩 館 美佐希
理工学部3年	吉 田 鈴
理工学部2年	向 井 阿修羅

■その他、特に優れた業績、功績等があったと認められる学生

地域社会研究科2年	孫 暁 儀
-----------	-------

理工学研究科

数物科学科



く が けん た ろ う
久我 健太郎

11月に着任しました久我健太郎と申します。福岡県出身で初めて雪国に住むことになりましたが、冬の大変さを身に染みて感じております。これまでの極低温、高圧、強磁場、放射光実験等の様々な研究経験を活かし、弘前大学では熱エネルギー関係の機能性材料の開発、原理解明を行います。青森県の特徴に即したデバイス開発も行い、地域に貢献したいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

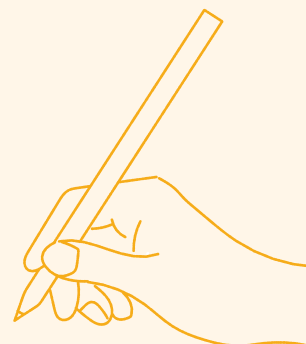


特集「卒業・修了・退職にあたって」を掲載した今年度最後の「学園だより」212号（3月号）をお届けします。まずは、原稿をお寄せ頂きました卒業・修了される学生の皆さん、ご定年を迎える教職員の皆さんに厚く御礼申し上げます。投稿して頂いた文章から、いかに皆さんが弘前大学で充実した日々を過ごされたかを知り、こちらも幸せな気持ちで一杯になりました。卒業・修了の学生の皆さんはこれからが本番です。弘前大学で培った叡智を結集し、社会で貢献されることを願っています。定年退職される皆さんには、是非「第2の人生」を謳歌して頂ければと思います。大学で過ごされたことを時々思い出して頂ければ嬉しい限りです。

編集後記

また、弘前大学の皆さん、いつも「学園だより」をご愛読頂きありがとうございます。特に今年は、異常気象、自然災害、物不足、物価上昇、感染症など多くの困難に直面しました。さらに、同じ地球上でいくつかの戦争が続いており、国際的な社会不安状態になっています。今後、弘前大学のすべての学部・研究科が教育・研究を通してこれら問題解決にどのように関わっていくのか、一丸となって取り組む時期が来ているのかも知れません。「学園だより」が皆さんを繋ぐ一助になればと思います。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

保健学研究科 伊藤



生協による大学の「研究・教育の支援」

弘前大学と弘前大学生協は以下の業務委託に関する契約を締結しています。

●福利厚生業務（学研災・学研賠償業務含む） ●教育支援業務 ●研究支援業務 ●その他大学業務



弘前大学生協では「研究・教育の支援」の一環で研究食材を活用したメニューを食堂で提供したり、研究の成果を生協店舗を活用して知っていただける機会の提供を行っています。

- 1：人文社会科学部企業戦略コースの学生とモホドリ蒸留研究所とで連携・開発されたリキュール販売
- 2：弘前大学6次産業化マイスター育成プログラム 食堂 Horest にてメニューの開発と提供
- 3：風間浦村×黄ゼミ SPV 風間浦村の特産品を使用したメニューの共同開発
- 4：市民 DAY「100 円ラーメン」「100 円カレー」の提供
- 5：「りんご美枝紙（みえし）」を使用した弘前大学ねぶたカップセルトイの販売
- 6：弘前大学への奨学金寄付『弘前大学生協同組合学生支援金給付事業』
- 7：地元産品で弘大生をつなぐプロジェクト 特産品のメニューや商品を生協店舗にて提供
- 8：「ビジネス戦略実習」食堂 Horest にて嶽さみを使った商品の開発と提供
- 9：「白神の森乳酸菌®入り 食パン＆コッペパン」の販売





弘前大学



学園だより

vol.212 / 2025年3月発行 題字：福田眞作 学長

編集：国立大学法人弘前大学「学園だより」編集委員会

委員長：平野 潔（教育委員会）

委員：近藤 史（人文社会科学部）

吉澤 忠司（医学研究科）

丹波 澄雄（理工学研究科）

成田 和香（学生課）

帆苺 基生（教育学部）

伊藤 巧一（保健学研究科）

管原 亮平（農学生命科学部）

白石 興介（学生課）

印刷：コロニー印刷

弘前大学

検索

学園だよりに関するご意見がございましたら、下記のアドレスまでお寄せ願います。

弘前大学学務部学生課 e-mail: jm3113@hirosaki-u.ac.jp